

専任教員教育研究業績

平成 29 年 5 月 11 日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
近藤 正子	こんどうまさこ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ 講師 ・助教	男・ 女

小田原短期大学における担当科目名

身体表現Ⅰ、身体表現Ⅱ、人間関係指導法、保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習指導Ⅰ、保育実習Ⅱ、保育実習指導Ⅱ

学 歴

和暦（西暦）年 月	事 項	学位
平成 6 年 4 月	奈良女子大学 文学部 教育学科 入学	
平成 10 年 3 月	奈良女子大学 文学部 教育学科 卒業	学士（文学）
平成 10 年 4 月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻 入学	
平成 12 年 3 月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻 修了	修士（文学）
平成 12 年 4 月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程複合領域科学専攻 入学	
平成 18 年 3 月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程複合領域科学専攻 博士課程単位取得後退学	

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
大阪リゾート&スポーツ 専門学校	平成 15 年 4 月～ 平成 18 年 3 月まで	専任講師「メンタルヘルス」「スポーツ心理学」「乳幼児心理学」「メンタルトレーニング論・実習」
近畿大学九州短期大学通信教育部保育部	平成 15 年 4 月～ 平成 19 年 3 月まで	非勤講師「教育心理学」「人間関係」
甲子園短期大学幼児教育保育学科	平成 18 年 4 月～ 平成 20 年 3 月まで	専任講師「体育」「保育内容「健康」」「身体表現」
甲子園学院高等学校	平成 19 年 4 月～ 平成 20 年 3 月まで	非常勤講師「体育(ダンス)」
畿央大学健康科学部	平成 20 年 6 月～ 平成 22 年 2 月まで	研究補助職員
大阪子ども専門学校（東京未来大学子ども心理学科通信教育課程大阪キャンパス）	平成 21 年 4 月～ 平成 23 年 3 月まで	非常勤講師「乳幼児心理」「教育心理学」「生涯発達心理学」「こころの理解」「対人コミュニケーション論」「子どもの認知と記憶」「パーソナリティの心理」「生理心理学」「比較行動学」
神戸常盤大学短期大学部	平成 21 年 9 月～ 平成 22 年 8 月まで	非常勤講師 幼児教育学科「体育Ⅱ」「体育実技・理論」、口腔保健学科「健康・スポーツ科学」
畿央大学	平成 22 年 4 月～ 平成 29 年 3 月まで	非常勤講師 理学療法学科「レクリエーション理論・実践」教育学部現代教育学科「レクリエーション活動」
神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科	平成 22 年 4 月～ 平成 29 年 3 月まで	非常勤講師「身体表現」「保育内容の研究・表現（幼小）」「体育Ⅰ」
園田学園女子大学人間教育学部児童教育学科	平成 22 年 9 月～ 平成 24 年 3 月まで	非常勤講師「保育内容指導法健康Ⅱ」
近畿大学九州短期大学通信教育部保育部	平成 24 年 4 月～ 現在に至る	非常勤講師「教育課程総論」「人間関係」「健康」「教師論」
神戸常盤大学短期大学部	平成 24 年 9 月～ 平成 25 年 3 月まで	非常勤講師 幼児教育学科「体育Ⅱ」、口腔保健学科「健康スポーツ科学」
神戸常盤大学教育学部子ども教育学科	平成 25 年 4 月～ 平成 28 年 3 月まで	非常勤講師 「保育内容「健康」」

近畿大学豊岡短期大学通信教育部こども学科	平成25年4月～ 平成26年3月まで	非常勤講師「教育原理」
兵庫大学生涯福祉学部こども福祉学科	平成26年4月～ 平成29年3月まで	非常勤講師「こどもと健康」
小田原短期大学保育学科	平成28年4月～ 現在に至る	専任講師「身体表現Ⅰ」「健康・スポーツ」「保育の心理Ⅰ」

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
日本体育学会（体育心理）	平成10年4月～ 現在に至る	会員
大阪体育学会	平成10年4月～ 現在に至る	会員
日本バイオフィードバック学会	平成13年7月～ 平成16年3月まで	会員
日本健康心理学会	平成22年8月～ 現在に至る	会員
日本保育者養成教育学会	平成29年1月～ 現在に至る	会員

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
奈良市役所健康増進課講師（ボデイワーク，健康に関する講義，体操指導，親子体操）	平成10年2月～平成15年3月	奈良市役所健康増進課が主催，もしくは市民グループの要請を受けて行われる健康増進事業の企画・実施を担当した。中高齢者を中心に様々な対象者に対して「健康（生活習慣病予防）」をテーマとする実技・講習，また幼児と母親を対象とした運動遊びや親子体操の指導を行った。この活動の目的は「市民の自主的な社会活動を援助するためのグループワークの提供」とされ，対象者から再度の要請を頂くほどに評価を受けていた。
社会福祉法人日本コイノニア福祉会地域子育て支援センター講師（親子体操，行事企画）	平成14年1月～平成15年3月	福祉法人がもつ幼稚園に併設されている子育て支援センターで母親の有志グループへの親子体操・ダンス講習の一部を企画・実施した。この活動の主な目的は「子育て中の母親の主体的社会活動の機会を提供する」ことであり，毎回多くの母親が出席し，積極的に活動を行っていた。親子の触れ合い体験や運動不足解消だけでなく，自主的な社会活動への参加による精神的健康への効果を期待するものであった。

担 当 教 科 目 に 関 する 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭一種免許（保健体育）	平成10年3月	奈良教育委員会
高等学校教諭一種免許（保健体育）	平成10年3月	奈良教育委員会
中学校教諭専修免許（保健体育）	平成12年3月	奈良教育委員会
高等学校教諭専修免許（保健体育）	平成12年3月	奈良教育委員会
「幼稚園教諭一種免許状」	平成24年	神戸常盤大学、担当科目「保育内容健康」

「小学校教諭一種免許状」の課程認定委員会における教員資格認定		2月			
研究実績に関する事項					
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1) 「子どものこころとからだを育てる保育内容「健康」」	共著	平成20年 4月	保育出版社	第2章 伝統的民俗行事と健康について (13.七夕 14.月見 15.七五三 16.その他の行事) 子どもの健康的な成長を促すことのできる保育実践力を養成するために考案された教科書的書。第2章では子供の健康的な成長への思いを神へ祈る日本の伝統的民族行事のその在り方を考える。後半を担当し、七夕, 月見, 七五三, お盆についてその起源や風習を詳しく説明した。 高内正子, 近藤正子他多数	
2) 「事例と図解で学ぶ保育実践『子どもの心の育ちと人間関係』-人を育てるためのかかわりと援助-」	共著	平成21年 3月	保育出版社	養育者や保護者、次世代の若者が「人とのかかわり」を軸にした幼児教育・保育実践へのイメージと気づきを得られるような理解しやすいガイドブックとなるよう編成された書。以下の4テーマを担当し、子どもの健全な人間形成にとって人生初期の情動コミュニケーションが重要であることを解説した。 「情動コミュニケーションと愛着の形成」「愛情遮断症候群」「依存と自立」「保護者の子育て支援の実際」 寺見陽子, 近藤正子他多数	
(学術論文) 1) ストレッチワークが中学生の心身に及ぼす影響ーワーク時のボディコンタクト及びBGMの有無に注目してー	単著	平成14年 3月	奈良女子大学大学院人間文化研究科年報第17号 p. 357-369	ストレッチワークを一人もしくはペアで行なう際のBGMを用いる効果について、中学生を対象に実験的に検討した。中枢神経系活動(背景脳波)と自律神経系活動(心拍・呼吸), 気分覚醒度(UMACL)への影響を比較した結果, ストレッチにより精神的・生理的にリラックスすることが明らかとなり, 男子のみにBGMのあるペアワークによるさらなる効果が認められた。	
2) 青年期におけるストレス反応に関する調査研究	共著	平成14年 3月	奈良女子大学スポーツ科学研究年報第4号 p. 62-68	大学生の精神的・身体的健康を測定する際に使用されているUPIを, 中学生・高校生を対象に用いてこの時期の子どものもつストレス反応について調査・検討を試みた。因子分析の結果, 「神経症傾向」「身体的反応」「社会的不適応」「無気力・無能感」「不機嫌・気分変動」「肯定的自己評価」の6因子が抽出された。また, 各因子の学年及び性差について検討した結果, 高校生により強いストレス反応が認められ, 女子の方がその傾向が強いことが明らかとなった。近藤正子, 平井タカネ p. 62-68	
3) 保育者に求められる身体	単著	平成19年 3月	甲子園短期大学紀要第25号 p. 71-76	「上手さ」に焦点を当て, 保育者に求められている身体表現力について考察し, 保育者養成校における科	

<p>表現力とは(1)</p> <p>4) 保育者に求められる身体表現力とは(2)-学生の意識調査と実技科目連携の試み-</p> <p>5) 身体内感覚に意識を向けるストレッチワークの繰り返しによる主観評価の変化</p>	<p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成20年 3月</p> <p>平成21年 5月</p>	<p>甲子園短期大学紀要第26号 p. 125-132</p> <p>奈良女子大学スポーツ科学研究年報第11号 p. 13-20</p>	<p>目「身体表現」の目標課題の調査・検討を試みた。女子短大生を調査対象として幼児向けのダンスを「保育者らしく踊る」ことを課題とした発表を録画し、教育実習指導者2名に採点・評価をさせた。その結果、手足の伸びや大きな動き、リズム感などが上手く見える要因となっていることが明らかとなり、動きの視覚的フィードバックが外的課題への気づきと強い意識付けを促すことが推測された。</p> <p>「保育者に求められる身体表現力」について学生や現場の教員がどのように考えているのかについてアンケート調査を行った。その結果、学生の6割が「環境としての保育者の身体」、3割が「教育的視点」が必要と答えた。特にI回生は「～になる」等の保育者自身の表現力、II回生は子どもが表現できる環境構成力が必要であると考えられる傾向があった。現場の意見も若い教員ほど現場での実践力を求め、ベテラン教員が環境構成力を求めていることが認められた。また、現場イメージをもたせる為に「まとめて考える」体験をもたせようと、造形・音楽科目と連携する並行した授業展開を試みた。短期間ではあったが、学生の表現活動に対するモチベーションと実技科目に取り組む姿勢を向上させることができた。並行する授業同士の連携と2年間を通した連続した授業展開が学生の実技科目に対する学びの質を向上させることが示唆された。近藤正子、松實輝彦、安田伸子</p> <p>リラクゼーションを目的として身体内感覚に意識を向けるスタティックストレッチワークの経験が主観的感覚に及ぼす影響とその反応の個人差や繰り返すことの効果について、ワーク前後に測定したUMACLとMCL-3の得点の変化から考察を試みた。結果、ワークによって気分的な覚醒度とポジティブ感情の上昇、緊張感の低減が認められたが、被験者によってその傾向が異なることや経験を積むことによる反応の変化が明らかとなった。本ワークにおける主観的なリラックス効果には沈静的もしくは覚醒的な状態がもたらされることが推察された。</p>
<p>(その他) (学会発表)</p> <p>1) 脳波からみたStretching効果について</p>	<p>共同</p>	<p>平成15年 7月</p>	<p>日本バイオフィードバック学会第31回大会(於大阪産業大学)</p>	<p>身体内感覚に意識を向ける動作としてのStretchingを課題とするワークのリラクゼーション反応について検討を試みるとともに、ワークによる主観的relax感に関連する中枢神経活動について考察を試みた。7名の被験者が20回の測定に参加。結果は、1)Stretching後に右前頭と左後頭でリラクゼーション反応を示すα波の増大が認められた。2)左後頭(P3)までのα波の増大が主観的relax感と関連することが明らかとなった。3)熟練者ではワーク中に前頭θ2波の増大(課題への注意集中の指標)が現れ、経験によるワークの質の変化が表れることが</p>

2) 背景脳波の変動パターンからみたストレッチワークのリラクセーション効果	単独	平成19年 9月	日本体育学会第5 8回大会(於神戸大 学)	推察された。近藤正子, 平井タカネ 身体内感覚に意識を向ける動作としてのStretching を課題とするワークのリラクセーション効果の個人特性について検討を試みた。成人女性7名が20回のstatic stretching ワークに参加。結果は, 1) $\alpha 2$ 波が増大する群と $\alpha 2$ 波が減少する群に分けられた。2) 主観的リラックス感には変化はなく、覚醒度得点と背景脳波との相関が認められた。3) 課題への慣れによって背景脳波のパターンが変化する傾向がみられた。
3) 背景脳波の変動パターンからみたストレッチワークのリラクセーション効果(2)	共同	平成20年 9月	日本体育学会第59 回大会(於早稲田大 学)	20回のstretching ワークの主観的リラクセーション効果と背景脳波との相関の検討を試みた。ワーク後は沈静もしくは覚醒的な効果を感じ、特に $\alpha 2$ 波増加群は「落ち着いた」 $\alpha 2$ 波減少群は「目が覚めた」リラックス感を示す傾向があった。脳波については両群ともに α 波成分の変動パターンに影響を受けており、ワーク中 $\theta 2$ 波と満足感、ワーク中 δ 波と α 波成分のバランスと主観的覚醒度が関連していることが推測された。20回を通してほとんどの被験者が3回目には「慣れた」8回目前後に「自分なりにできる」と記し、脳波も変化する傾向がみられ、確かなリラクセーション効果を得るためには一定の経験を必要とすることが窺えた。またワーク中の「身体(筋)への集中度」がリラックス感を得るための主観的指標であることも示唆された。近藤正子, 荒木雅信
4) ストレッチングワークの心理的リラクセーション反応	単独	平成21年 8月	日本体育学会第60 回大会(於広島大 学)	身体内部に意識を向け“心地よい痛み”を手がかりに全身の筋を伸展させる身体運動であるスタティックストレッチングに注目し、その心理的リラクセーション反応について考察を試みた。成人女性7名(22~31歳)に20回のストレッチングワーク(20~30min)後にアンケートとともに自由記述を求めた。ワーク後の主観的心理指標を得るためにその内容を次のように分類した。ワーク後の気分について(気分の良さ・リラックス感・覚醒度・安寧・満足感・やる気), ワーク後の体調について(身体状態・体調の良さ・身体感覚(空腹感・温感等)), ワーク課題に対する感想(満足感(出来・集中度)・快感度・慣れ・外乱・時間感覚), その他(ワーク中の気分の変化・ワーク後の時間経過に伴う変化・ストレッチの効果について)
5) 「リラックス」の認知に関する研究	単独	平成22年 9月	日本体育学会第61 回大会(於中京大 学)	スポーツインストラクターを養成する専門学校に通う生徒273名を対象に「「リラックスしている」とはどのような状態だと思いますか」への記述から「リラックス」の認知に関する基礎的調査を行った。記述内容は、安定感(落ちついている, 穏やかななど), 眠気(寝ている, 眠いなど), 筋弛緩(体の力が抜けているなど), 無の状態, 快感情(気持ちがいい, 楽しいなど), ストレスの緩和(ストレ

6) 心身の快適性評価に関する調査研究	共同	平成23年 9月	日本健康心理学会 第24回大会（於早稲田大学）	<p>スがないなど)に分類された。特に筋弛緩や無の状態を述べた者、「自然体」や呼吸・心拍数など独特な表現をする者には競技経験の長い生徒や高い実績を持つ生徒に多くみられた。また、経験競技内容(open skill, closed skill, 武道系)により「リラックス」観が異なる傾向が認められた。</p> <p>リラックスに関する自由記述から抽出した言葉から、リラックス感に関する26項目のアンケートを作成し、スポーツインストラクター養成専門学校生199人に実施した。スポーツ経験が10年以上もしくは全国レベルの大会参加経験をもつ生徒をスポーツ熟練者群(n=103)、それ以外を非熟練者群(n=96)として、それぞれで因子構造を比較したが、ここでは明らかな差を認められなかった。そこで、両群において同じ項目を持つ因子を構成することができるかを検討するために、Kanoら(2000)の方法を用いて因子分析モデルの適合度の観点から検討した結果、9項目で1因子を構成できると確認した。また、熟練者と非熟練者とに共通する項目を選択する過程から、群の特性によって「リラックス感」の構造が異なる可能性が示唆された。本研究で採用したリラックス感尺度の平均得点と「心の状態」「体の状態」「リラックス度」との相関係数を求めたところ、両グループともに、すべてに高い正の相関が認められた。近藤正子、佐久間春夫</p>
その他（表彰等）				